

神戸市保久良神社境内、銅戈出土地の発掘

石 野 博 信

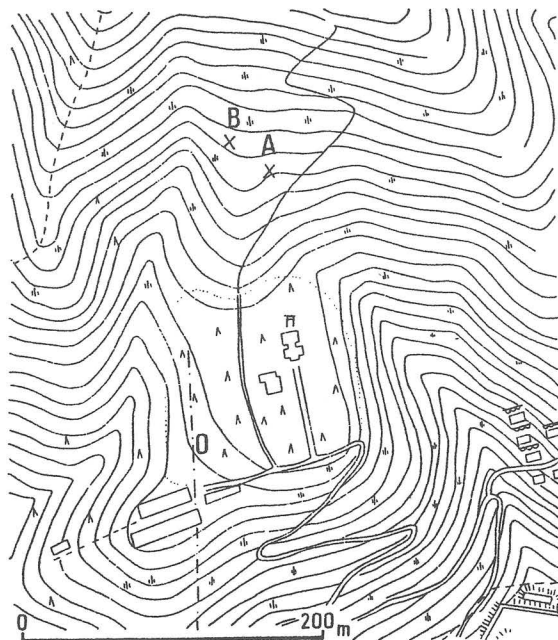
はしがき

一九五二年（昭和二七）四月、宮城県牡鹿郡渡波町（現、石巻市）から一人の青年が関学に入
学した。旧制中学から高校時代に、ひたすら仙台湾岸の縄文貝塚を歩きまわっていた青年は、当
然のように文学部史学科を目ざした。実は、青年は大学へ進まずに親の職業を継ぐ決心をしてい
たので、関西六大学の存在も知らなかった。親の勧めで関学に願書を貰いに行つて「甲山と図書
館と芝生」の魅力に取りつかれたらしい。史学科はできたばかりで、第一志望者が少なかつたら
しく、そのおかげで何とか入学できた。

史学科主任教授、栗野頼之祐先生は、『出土史料によるギリシャ史の研究』で「学士院賞」を受
賞されていた。西洋史概論の時の一言、「歴史を心ざすものは、明日の株の値動きが予測できなけ
れば駄目だ」は今でも憶えている。真面目な東北青年は、新聞の株価欄を毎日見て、何ヶ月も株
の値動きのグラフを作った。但し、今だに株を買ったことがない。

先生は、「歴史は未来を知るためにある」と言いたかったのだと思うが、あまりにも例えが具体
的過ぎて理解できなかった。

当時、京都大学から水野清一先生が講
義に来ておられた。たまたま休講の五月
十二日に藤木先生（日本近世史）が保久
良神社遺跡の半日発掘を計画され、参加
学生を募集された。青年は喜んで応募し
た。しかし、保久良神社遺跡の何たるか
は、何も知らなかった。すでに、国学院
大学の樋口清之教授によって銅戈をも
つ「磐境」として紹介されている著名な
遺跡だ。青年にとって関西初の発掘参加
であり、今や貴重本である『摂津保久良
神社遺跡の研究』（国学院大学駿杉会、
昭和十七年）の紹介から始めよう。



遺跡付近の地形（○印—銅戈出土地点）

A.B 金鳥山遺跡

O 保久良神社遺跡、銅戈出土地

図1 保久良神社遺跡と金鳥山遺跡

一、保久良神社遺跡（神戸市東灘区本山）

遺跡は、六甲山麓の標高一八〇メートルの尾根上にあり、背後の金鳥山遺跡と本来は一体のものと考えられる（図 1）。樋口教授によれば、社殿を含む約一〇〇メートル余の平坦地に十二群の巨石群があり（図 2）、その間から採集された弥生中期中葉の土器や銅戈が同神社の猿丸社司によって保管されている。（図 3、4）。

中でも巨石群の巨石下から銅戈と石斧、石鏃が出土しており、「磐境」と青銅製祭具の関係が注目されている（図 5）。

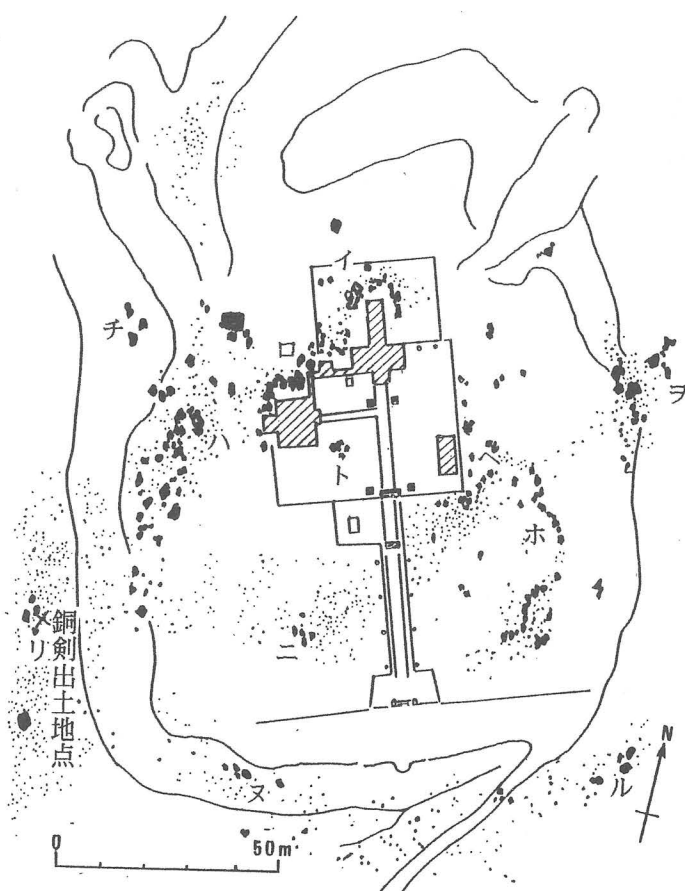


図 2 保久良神社遺跡 境内の巨石群

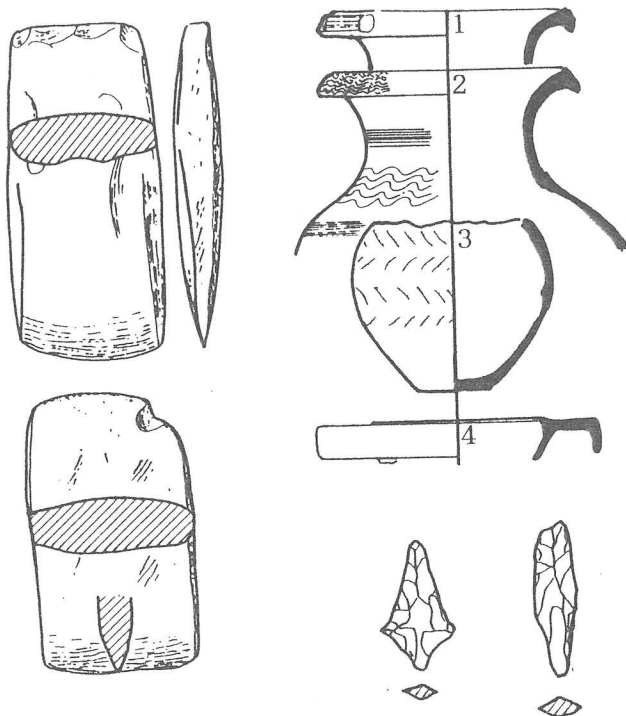


図3 巨石群出土の土器・石器

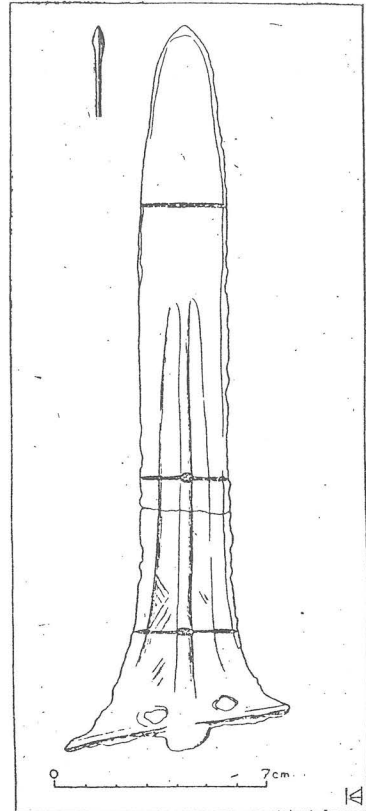


図4 巨石群出土の銅戈実測図

二、関学史学科による半日発掘

〔石野発掘日誌抄〕(図6)

五月十二日(土)晴、始業二時三〇分、

終業四時三〇分

参加者 藤木助教授ほか史学科生 10 名

観察 遺跡としては非常な高所だが、六甲山麓の各尾根や上ヶ原など同一の高さに弥生遺跡が多いそうだ。遺物は、猿丸家所蔵品を見ると祝部式・弥生式土器などの他、クリス型銅剣が伴出し、また磨製石斧もある。水は不便そうだが、風光明媚。

出土遺物 土器片少々、その他なし

〔現在の所見〕 発掘地点は、銅戈出土地点近くの巨石群で、巨石に接して一メートル四方で深さ一メートル弱程度を二、三ヶ所探った程度だった(図7)。土層メモによると、現表土下五〇センチは黄橙色土層で遺物はなく、その下の黒色土層に土器が含まれていた。調査としては準備不

足で発掘調査と言えるものではなかった。

しかし当時、同年八月に行われた関大、関学合同の川西市加茂遺跡発掘もそうだが、学生の実習のための発掘意図があり、藤木先生も専門外なのに休講の穴埋めを土曜午後に担当しておられたことを改めて知った。感謝したい。

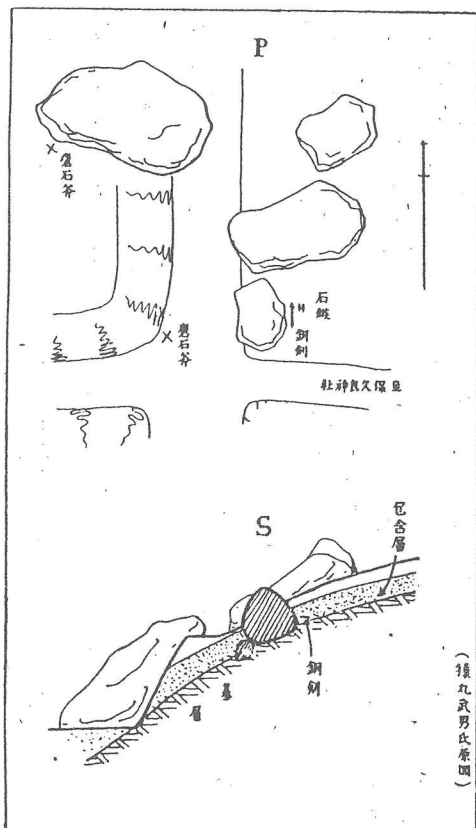


図5 巨石と銅戈出土地

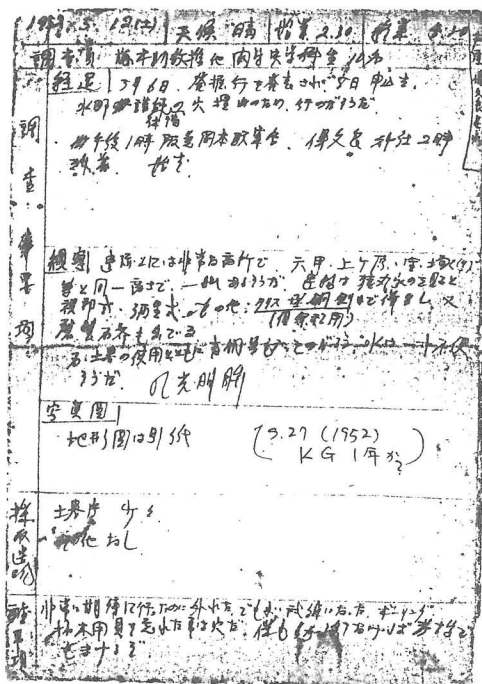


図6 保久良神社遺跡の調査日誌

三、金鳥山遺跡と保久良神社遺跡

一九六二年（昭和三七）二月、芦屋市教育委員会の岩本昌三さんと保久良神社裏山の金鳥山を訪れた。目的は、会下山遺跡と保久良神社遺跡の二つの弥生高地性集落が、六甲山麓の中腹でつながるルートがあるか、という点であり、歩いてみようということになった。ルートはあるが険しく、両遺跡とも背後から攻めるのは難しい、と感じた。

当時、金鳥山は遺跡として認識されていなかったが、社殿から一〇〇メートル余北方の山腹に少なくとも四ヶ所の弥生土器包含層を認めた。武藤誠先生とご相談し、神戸市教育委員会の諒解を得て行なった発掘調査の成果は、「神戸市金鳥山遺跡—銅戈出土地の裏山」（『古代学研究』四八、一九六七）として報告した。

金鳥山遺跡は弥生中期後半が中心で、遺構としては尾根を幅五メートル余、奥行二メートル余カットして平坦面をつくり、二、三基の柱穴をもつ(図8)。“機能不明の平坦面”と仮称し、神戸市伯母野山遺跡にも同種遺構があることを想起した(「神戸市伯母野山弥生遺構―集落内の機能不明の平坦面について」『兵庫史学』三七、一九六四)。

一九八四年(昭和五九)に島根県斐川町神庭荒神谷の三五八本の銅剣埋納地を見学したとき、伯母野山と金鳥山の“機能不明の平坦面”を想った。埋納地は、丘陵斜面を幅四・六メートル、奥行二・六メートル余カットして平坦面をつくり、そこに整然と銅剣が並べられていた。も

しこれが、金属器ではなく、織物や木製祭具などであったとしたら腐蝕して何も残らず、ただの平坦面だけだ、と。

島根県ではその後、神庭荒神谷では銅鐸と銅鉾が、加茂岩倉では銅鐸四〇個が平坦面にそれぞれ埋納されていた。

神戸市神岡桜ヶ丘には十三個の銅鐸と六本の銅戈が埋納され、保久良神社の岩倉には銅戈が埋納されていた。そしてそこに、“機能不明の平坦面”がある。金鳥山の平坦面には有機質の祭具が埋納されていたのであり、金属製祭具としての銅戈もあった。だからこそ、延喜式内社でもある保久良神社の社名＝ホクラが伝承されていたのだろう。

弥生時代の青銅製祭具の多量埋納地に“カミ”地名が残る恐ろしさについては、森浩一さんの『対論 銅鐸』(学生社、一九九四年、九五ページ)でも述べた。その一画に東北から出て来たばかりの由緒正しいズーゾー弁だけをしゃべる無知の一青年が、鍬を入れた恐ろしさを、五二年前の半日発掘の拙い記録と現在の想いを述べて結びとしよう。

あとがき

一九五二年(昭和二七)の関学一回生の時から一九六六年(昭和四一)の尼崎市田能遺跡調査の頃までの十四年間は、武藤誠先生がかかわっておられる発掘調査への参加の日々だった。一回生の八月に行われた関・関合同加茂遺跡調査には、当時形の上では四回生だった拓植〇〇さんや三回生の八重津洋平さんも参加され、関大生とソフトボールや相撲の関関戦に熱中した。

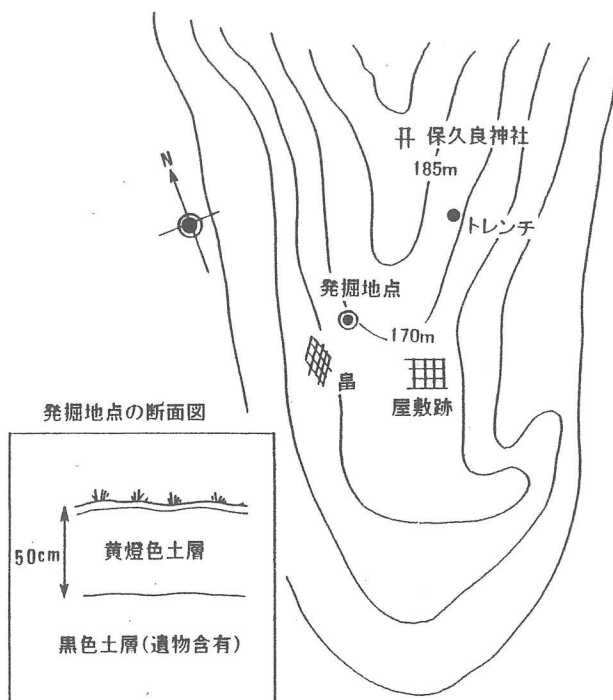


図7 関学チームの発掘地点と土層メモ

私は、たまたま考古学で卒業論文を提出した一期生らしいが、テーマは「近畿地方における縄文文化末期の様相」で、中学・高校を通じて歩きまわった縄文遺跡への関心の名残りであった。それでも関心は関西大学大学院の修士論文「縄文弥生移行期の研究」として続き、二〇〇四年に『橿原考古学研究所論集』に発表した。

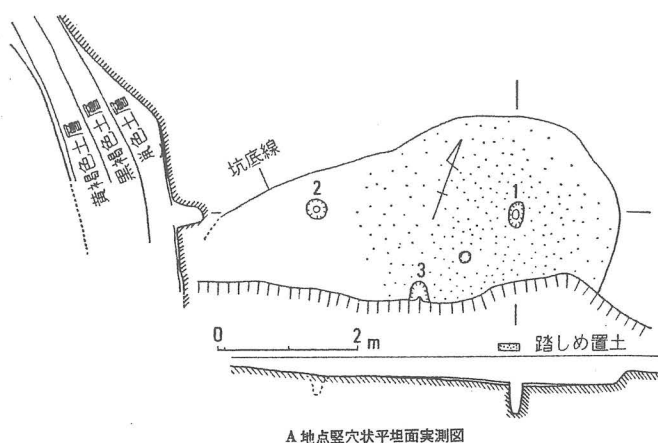


図8 金鳥山遺跡の機能不明の平坦面

関学卒業のとき日本史の大学院がなかったことと、一回生のとき末永雅雄先生にお会いしていたこともあって大学院は関西大学に移った。それ以来、関々戦は常に私の身体の中にある。

とは言うものの、私には学閥意識はほとんどない。むしろ、関学生は“口だけ達者で、体は動かさん”という不満があった。それでも、関西で時折、関学OBの考古屋に会うと気になり、新潟でOBに出会ったときには、“こんな関学生も居ったのか”と驚いた。

それでは自分は“関学考古学”のために何をしたのか、と考えるとほとんど何も残していない。それに比べれば、後輩のだれかが、『関西学院考古』を創刊し、ともかく継続しているのはいい事だ。今回、“十号記念に原稿を”と言われたときには、“ともかく参加したい”と思った。そして関学一回生の最初の発掘調査日誌があるはずだとエントリーした。あるにはあったが、きわめて簡略で、資料的価値がないことが分かった。それでも一回目にこだわって、“弥生祭具埋納遺構”に及んでしまった。“機能不明平坦面”は、祭具埋納の可能性はあっても、まだ、“不明”のままだろう。そこが楽しみだ。